柿生文化

平成２２年９月１８日
川崎市立柿生中学校
柿生郷土史料館 情報・研究誌
第２７号

「津久井道」今昔

・津久井道の役割は
・柿生駅周辺の旧津久井道を歩く

今は昔、かつて柿生・岡上の重要な生活道路であった「津久井道」……小田急線が開通したのが昭和２年のことでした。現在の世田谷・町田線のような大きな道がまだ存在していなかった頃、郷土の姿は一体どんな様子だったのでしょうか。今回は現在の「津久井道（世田谷・町田線）」と昔の「津久井道」を地図と写真で追ってみたいと思います。皆さんも歩いてみてみた方はご存じかと思いますが実際の「津久井道」は東海道や中仙道のような街道ではなくごく小さな「道」であることが実感として分かるはずです。一体「津久井道」とはどんな役割を果たし、そこにはどんな町並みと人々の生活があったのでしょうか。今回は柿生駅周辺の津久井道の今昔の姿を考えてみたいと思います。

①（昭和45年頃の柿生駅前：左に郵便局）　（正面右が柿生駅前：郵便局は現在薬局）

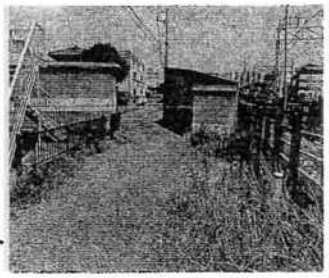
旧津久井道は、現在のものとはずいぶん異なっています。途中途中で新道と合流したり途切れたりしながら今日でも生活道路としてその役割を果たしています。

なお、「津久井道」については１０月５日（火）午後６時から柿生中学校で第２４回カルチャーセミナーで「川崎の街道~津久井道探訪~」というテーマで講演が行なわれます。

②（明治期か？柿生村役場：現柿生保育園）

（正面奥が旧柿生村役場跡：現在の柿生保育園）

（麻生区内の旧津久井道）



③（右側小田急線に分断された旧津久井道、昔はここを右へ曲がる）

日本で 地図上の方眼の創始者は森鴎外だった

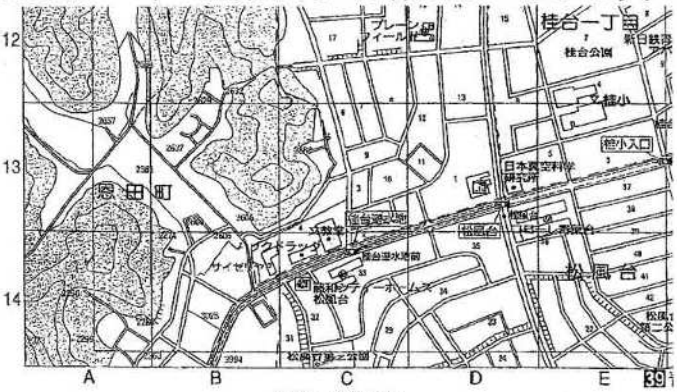
ドイツ留学時代の鴎外(左)

現代では、旅行地図などは一般的に下の地図のように地図上に方眼が描かれています。これは地名を捜し出すために便利なものですが明治初年、日本ではまだこの方眼が描かれていませんでした。当時ヨーロッパでは旅行案内書などには「方眼」を用いた検索機能がついていました。(明治14年迅速図の縦横のラインは測量上のもの)

日本でこの方法を取り入れたのが、文学者であり陸軍の軍医でもあった森鴎外（本名：森林太郎）でした。彼は、ドイツ留学中(明治17年~22年)に「方眼図」の便利さを知り、東京の地図への応用を試み「東京方眼図」の中で立案したのが始まりのようです。

鴎外は、明治４３年(1910年)から連載をはじめた小説『青年』の中で主人公の小泉純一にこの「方眼図」を持たせ、東京の本郷から根津へと歩かせています。作品の小道具として使うだけでなく一種の広告宣伝効果も狙ったのではないかと考えられています。現代では当たり前のようにして使われていますがこんな努力もあったのですね。

(参考資料：東京大学創立130周年記念事業展示作品)



(現代の方眼地図)

文献から杉山神社を探る

第２３回
柿中カルチャーセミナー報告

(熱心に聴き入る出席者の皆さん)

８月３０日（月）午後６時から本校の視聴覚室で第２３回カルチャーセミナーが開催されました。

約３０名の方が集まられ、講師の横浜歴史博物館主任学芸員の平野 卓治 氏の講演を参加者の皆さんが大変熱心に聴かれていたのが印象的でした。

今回のテーマは「古代の杉山神社」と題して杉山神社に関する研究について、基本的な事柄を古代の文献により考証してみようということでお話をいただきました。

始めに古代の資料にみられる「杉山神社」について『続日本後記』『延喜式』の文献をもとに「杉山神社」に関する記述を確認されました。次に古代の神祇制度における官社(神名帳に記載された神社)とはなにか、式内社(『延喜式』の神名帳に記載された神社)とはなにか、神社の位階について、古代の村と神社について、「杉山」の名称について、等をテーマについてそれぞれ解説されました。いずれにしろ謎の多い杉山神社ですが今後、文献のみならず考古学、民俗学、地名学などあらゆる分野からの研究が待たれるところと感じました。

(熱演される講師の平野先生)

― 柿生・岡上地名考 V ― 片平

多くの文人が愛した片平

片平は、中央に片平川が流れ、左右は岡となっています。古くは川の周辺の低地では水田が広がり、両側の岡では畑作が中心となっていたようです。（「片平村絵図」天保7年参考）

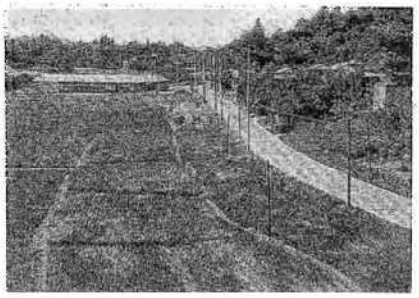
（片平村の字と小字）

江戸時代には旗本の前場氏が知行（主君から与えられた土地を支配すること）しており、稲作で１６８石、畑作で１００石（正保3年頃：1646年）で周辺の村と比較しても収穫量は悪くないと思います。

「**片平**」の地名は、黒川に向かって片平川を挟んで左側はなだらかな丘陵地帯、右側は急な小高い岡になっています。あるいは道を挟んで左側には平らな水田が広がってることから「片方が平坦」ということから「片平」の地名がついたのではないかと考えられます。

片平は、明治期から北原白秋や橋田東声、荻原井泉水、柳田国男など多くの文人・学者たちが好んでこの地を訪れています。

上の地図を見ると多くの「谷戸（やと）」のついた地名が見られることからも起伏の多い地形が思い浮べられます。**赤せき**は麻生川が片平川に合流する手前の所ですが、この地域は土に鉄分が多く、支流や地下水の吐き出し口付近が鉄渋で赤くなっているところを指しているのではないかと考えられます。**金井原、金井谷戸**も鉄に関する地名ではないかと思われます。



（柿生小学校より片平方面を望む：昭和45年）

享保台（京坪台）は江戸時代の享保（1716~1736年）の頃に開発された所ではないでしょうか。**夏苅屋**（なつかりや）は夏苅谷戸からきたのではないかと考えられます。「夏苅」は近くの修広寺の号が「夏苅山」ですので関係はあると思われます。一方、夏に焼畑をやることを「夏苅り」ということから来た地名とも考えられます。**吾妻**（あづま）は付近に白鳥神社があり祭神の日本武尊との関係で付けられたのではないかと思います。**富士塚**は富士信仰によって造られた塚が付近にあったからではないかと思います。**日向**（ひなた）は、日当たりの良い土地を指しており実際にこの辺は南側の斜面です。（参考資料：「川崎地名辞典」、「新編武蔵風土記稿」、「武蔵田園簿」、「片平村絵図」天保7年）

（天保7年の片平村絵図）

カルチャーセミナー案内

第２４回
柿中 **カルチャーセミナー** ご案内

日時　平成２２年１０月５日（火）
午後６：００より

会場　柿生中学校視聴覚室

テーマ　「川崎の街道～津久井道探訪～」

講師　**對馬　醇一**　氏
（元、菅生中学校長）

内容　津久井道の昔の姿や役割りを中心に考察します。

川崎市民ミュージアム情報

企画展

アイヌ　－美を求める心－

期　間　平成２２年９月１８日（土）
～１１月７日（日）

会　場　川崎市民ミュージアム

内　容　古くから周辺文化の影響を受けつつ独自の文化を形成してきたアイヌ民族の工芸品や民具などのアイヌ文化を展示・公開しアイヌの美と心を探ります。

関連イベント　講演会「アイヌ文化~伝統と現代~」
１０月１６日（土）14:00~

ぞくぞく寄せられる郷土史資料　有難うございます

学校では、史料館の１１月２０日開館をめざして日々準備を進めているところですが、地域の方々からも多くの郷土史資料が続々と寄贈・寄託されております。

長瀬和徳氏からは、江戸～明治期の古文書を、高瀬隆雄氏からは石器・土器を、青戸邦夫氏からは、研究資料をご寄贈いただきました。有難うございました。

（貴重な蔵書をご寄贈：青戸邦夫氏宅）

郷土史料館「史料」の寄贈・寄託のお願い

このような史料はありませんか

◎古代の「縄文土器・弥生土器」「石器」「土師器」「須恵器」
◎江戸時代の「検地帳」・「水帳」・「五人組帳」・地域の「絵図」
◎江戸時代の「高札」（慶応４年の太政官布告「五榜の掲示」など）
◎江戸時代の寺子屋や私塾で使用した教科書・手本「各種往来物」
◎江戸時代の「藩札」「通行手形」
◎明治期発行の「地券」　◎明治期の「自由民権運動」史料
◎明治・大正・昭和（戦前・戦中）の「国定教科書」・「新聞」
◎小型の農具「千歯こき」「備中鍬」「からさお」
◎各時代の「古銭」「生活古民具」（矢立て・印籠・火打ち・鏡・装束など）
◎その他各種史料「各種古文書類」「美術品」

寄贈・寄託していただける史料がありましたらご一報ください。
柿生中学校　０４４－９８８－０００４　黒川まで